

むかしむかし、天皇さまが京の都に住んでいたころのお話です。

遠い遠い外つ国から、とても強い妖力を持った化け狐がやってきて、日本を滅ぼそうとする事件が起こりました。悪たくみに気づいた都のえらい人たちは、化け狐を退治するため日本中から強い武者や陰陽師を集め、討伐隊を結成することにしました。その中のひとりに選ばれたのが、衣笠城に住んでいた三浦大介義明でした。

「三浦大介よ、お前は特に武勇に優れている。討伐隊の隊長として、みなを率いてくれ」

「はっ！ おまかせくださいー！」

得意の太弓を手に、義明は力強く答えました。

そんな様子を知った化け狐は大あわてです。

「あいつらは強い。このまま都にいたら、退治されてしまう」

そこでこっそりと都を抜け出し、東国へ落ち延びていきました。

ですが、ここで逃してしまうと、またどんな悪さをするかわかりません。

現在の栃木県 那須野でようやく追い詰めることができました。討伐隊は化け狐を追跡し、下野国

「おのれ、討伐隊め！ 我が力を思い知れ！」

死にものぐるいの狐は、妖術を使って抵抗します。討伐隊は一騎当千

の兵が揃っていたものの、化け狐の力はあまりに強く、苦戦を強いら

れていました。

「このままでは埒が明かぬ」

討伐隊の人々が困り果てた、そんな時です。

「おのれ、化け狐。我が矢を受けよ！」

義明は気合を込めて弓を引き、矢を射掛けました。

すると、その矢はみごとキツネの首と脇腹を貫いたではありませんか。

さしもの化け狐もこれはたまりません。

ひるんだところに房総の武士・上総介広常が襲いかかり、止めを刺しました。

こうして化け狐は無事退治されましたが、殺された化け狐のくやしき思いだけは消えずに残りました。

「口惜しや、たごえこの身は滅びても、おめしらを恨む心は滅ばぬぞー！」

すさまじい怨念は石になって凝り固まり、すべての生き物を殺す毒の気を吹き出し始めました。そのため、人も動物も鳥も那須野に近づけません。石はいつしか「殺生石」と呼ばれるようになり、那須野は、生き物の気配ひとつない、荒れ果てた地になってしまいました。

それから長い年月が経ったある日のこと、那須野に一人のお坊さんが現れました。

玄翁和尚という、とても徳の高いお坊さんです。

玄翁和尚は、死んでもなお毒をまきちらして人々から嫌われている化け狐をかわいそうに思い、成仏させてやるつて考えました。



「化け狐よ、今こそ恨みの心を忘れるのだー」

我が身の危険も顧みず殺生石に近づくと、大きな金槌で「えいやー！」と石を打ちました。すると、石は粉々に割れ、石に宿っていた怨念もきれいさっぱり砕け散りました。勢いよく弾けた破片は、日本国中に飛び散りました。

この衣笠の地にも、ひとつ。けれども、それに気づいた人は誰もいませんでした。

それからまた長い年月が流れました。

ある日のことです。

突然破片がくるくると回転し、パキッと割れたかと思うと、小さな小さなキツネが生まれました。

「うう、ううなの〜」

キツネは不思議な力を持っていましたが、まだ生まれたばかりの赤ちゃんなのでどうしたらいいかわかりません。ただただ、途方にくれるばかりでした。

そんな時です。

「おや？ お前はもしや那須野の化け狐ではないか？」

キツネが振り向くと、そこにはひとりのおじいさんが立っていました。

「わたしは生まれたばかりで、なにもわかりません。おじいさんは、わたしが誰か知っているのですか？」
それを聞いたおじいさんは、にっこり笑ってこういいました。

「そつかそつか。何もわからぬか。ならば、わしと一緒に暮らそう。わしの名は三浦大介義明。みんなおおすけさんと呼ぶから、お前もそうすればよい」

おじいさんの正体は、死んだ後、神霊になっていた三浦大介だったのです。

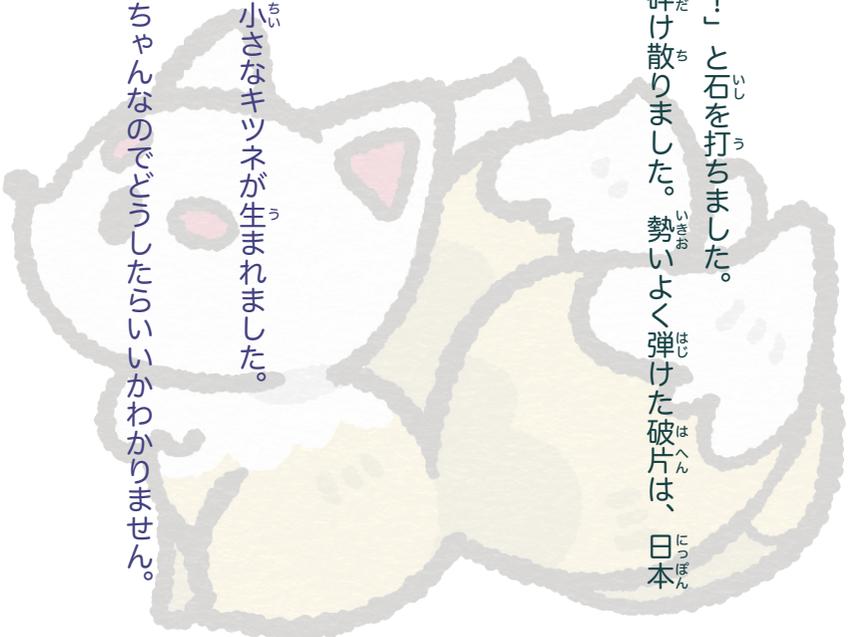
おおすけさんの優しい言葉にキツネはたいそう喜んで、それから二人は一緒に住むようになりました。

おおすけさんは、キツネを「こきぬ」と名付け、衣笠城につれて帰りました。そして、衣笠の周辺に住む人たちの幸せを、陰ながら見守ることを教えました。

それからまたまた長い年月が流れましたが、今でもおおすけさんとキツネのこきぬは衣笠の人々を守っているといます。

こきぬは時々人間の姿に化けて、商店街でお買い物をしているそうですよ。

おしまい



不思議なキツネ こきぬのおはなし



作・いしだみお